龍よ、龍よ！ 其の二十七

今回の更新はクソ難産だった……

◇

「なにその強化効果の徳用パック！？」

「ダメボにリジェネ……いや、一定間隔で回復判定、って感じかな？」

「くっそー……やっぱあれずるいなぁ……」

ペンシルゴンの見上げた先、明らかに尋常ならざる輝きに包まれたスカルアヅチを睨みつけながら唸るようにぼやく。

示された条件はノワルリンドとの相対であるが、付与される効果の確認自体は黒竜以外と相対するプレイヤーであっても可能だ。そして、スカルアヅチのリソースをフルに使用しているのだろう破格のバフは、プレイヤー達の目の色を変えさせるには充分であった。

「どうするリーダー？ 殴って止める？」

「いい考えだね、じゃあ如何に私たちの手を綺麗なまま殴るか考えよっか」

ペンシルゴンとオイカッツォはノワルリンドではなく、ブロッケントリードの相手をしていた。というのも、ペンシルゴンは反ノワルリンド派の妨害のために生き残ったマンディーズを集めるために、オイカッツォは白と緑を交互に相手して暴れまわるアージェンアウルを探しに。

互いに全く異なる目的ではあるが目指す場所が同じであったが故に共に戦っていたのだった。

「トップクランの号令があっても向こうには天ぷら騎士団とかがついてるし、アドバンテージはほぼない……スカルアヅチのバフに匹敵するアドバンテージは流石に提供できない…………ねーカッツォ君。悪だくみが三つくらいあるんだけどさ、やっぱ全部やったら他の子達に迷惑かかっちゃうよねぇ？」

極めて珍しいことに、悪だくみに対して「迷い」を見せるペンシルゴンにオイカッツォは目を丸くする。

成る程、これがサンラクとオイカッツォにだけ迷惑がかかるのであればペンシルゴンは迷う事なく実行していただろう。

だが、今の【旅狼】は外道だけではなく、オイカッツォの目から見ても「不健全な」ゲームプレイには向いていないプレイヤーもいる。

肉親を派手に破滅させた女が何を今更善人ぶるのか、と思わなくもないが……違う、違うのだ。

「……それでも、やらなきゃいけないんだろう？」

「……そうだね」

ペンシルゴンは迷っているわけではない、いや仮に迷っていたとしてもここまで露骨に表には出さない。

では何故こんなわざとらしく振舞っているのか？ わざと(・・・)だからに決まっている。

「よし、やろっか！」

あからさまに「何か事情があって、故にこそやらねばならない」とでも言いたげなそぶりで予定調和の作戦開始を告げる。

ブロッケントリードに対応する……フリをしてその巨体をもたつかせることでプレイヤー達の動きをそれとなく阻害していたマンディーズが天高く掲げられたペンシルゴンの指がパチン、と鳴った事でその動きを変える。

「マイマンディーズ！ 戦場を変えるよっ！ アザーマンディーズもっ！！」

「「「「イェアァァァァァア！！」」」」

重装の鎧達が歓声を上げる。

ズンズンと重厚な歩みで進むマンディーズを、さながら楽団を率いる指揮者の如くペンシルゴンは次なる戦場へと導いていく。

「防御専念！ 攻撃は一切行う事なく、ノワルリンドの攻撃からプレイヤーを守るのだーっ！！」

「あぁ、肉壁(・・)ね……どっち向きに聳えてるのかはともかく」

タンクとは最前列に立って敵の攻撃を受け止める防波堤、しかし彼らが「居座って」しまえばそれは戦列の内の一つが常時埋まり続けるという事なのだ。

「やだなぁ、ノワルリンドの被害を減らすため……善意だよ善意ィ」

マンディーズの存在はその情報を広めたいゼニス・ゲバラと超農民の手によって存分にアピールされている。念のためにとノワルリンドへと流れたプレイヤーの中にゼニス・ゲバラとペンシルゴンの息がかかったスパイロール・プレイヤーを混ぜてあるため、ブロッケントリード戦でそれなりの戦果を挙げたマンディーズが積極的に排除されることはないだろう。

「お次は……おっ、丁度いいタイミング。やぁそこのサムライウサギ！」

「むむっ、貴殿はペンシルゴン殿！？」

最早この場においては姿を隠すまでもないのか、ディアレやエムルと同様にその姿を衆人環視に晒しながら駆けてきた侍装束の兎を呼び止めつつも、ペンシルゴンはその後ろにいた爬虫類の特徴を強く見せつける人型の者達を見回し、笑みを浮かべる。

「いいねいいね、蜥蜴人族(リザードマン)達と一緒にいてくれたのはとても素晴らしい……秋津茜ちゃんのところに向かうところ？」

「如何にも、そうで御座るよ」

「イイネ！ いや何、蜥蜴人族や竜人族については秋津茜ちゃんから聞いてる、あそこに混ざるなら……そう、ノワルリンドをそれとなーく守って欲しいんだよね？」

「拙者らが守る必要あるで御座るか？」

首を傾げるシークルゥに対して、ペンシルゴンはバシバシとその肩を叩きつつニッと笑いかける。

「ノワルリンドにフォロワー(・・・・・)がいるって事が重要なのさ、ヨロシクネ！！」

「む、承知！ ……って、何故拙者を担ぎ上げるで御座るか！？ ちょっ、のわぁぁぁぁ………！！？」

何やらノッてる時のサンラクにも似た……要するに、人の話を聞かなそうな雰囲気を漂わせた爬虫類的人類達に何故か神輿の如く担ぎ上げられて去って行ったシークルゥを見送るペンシルゴンの瞳に「あいつらを僅かでも制御下から離して良いのか」と不安が過ぎる。

否、とペンシルゴンは両頬をペチペチと叩いて気合いを入れる。

戦況とは常に流動的で不安定なナマモノ(・・・・)なのだ、多少の不確定要素を考慮した作戦立案は基本中の基本。であればあの程度のイレギュラー、なにするものぞ……

※イレギュラーその二

「ヘーイ！ ケッツォもブロッケントリード殴りに行きましょーっ！！」

「ちょっ、どこ掴んでぇえええ……！」

※イレギュラーその三

『白竜ブライレイニェゴの肉体が、生命の危機に裏返る』

『危険(Caution)！ 災害状態(ハザードモード)！！』

※イレギュラーその四

『トットリィィィィ！！』

「いやだからなんで俺ばっか狙ってくるんだよぉぉぉおおおお！！！」

※イレギュラーその五

『ハハハ、クハハハハハハハハ！！ よくぞその「名」をほざいた！ ならば貴様の不滅(・・)とやら、我が全身全霊を以って燼滅してくれようぞ！！ 見るがいい、天覇(・・)たる我が「龍王(Dragon)機関( × Driver)」を！！！』

…………

……

「活きが良すぎるんだよチクショーッ！ やってやろうじゃないの！！」

夜空に響く、ペンシルゴンの叫びは戦場の音に溶けて消えて……

たまに自分で書いた作品を頭から読み返したりしてると設定の食い違い見つけてメンタルにヒビが入るやーつ